

第二部 追放の被害者

第一章 追放された人間像

寫 信正 (しま・のぶまね)



寫信正が反骨を自覚した最初は旧制中学2年の時だった。1912年9月、京都府の南端、古都・恭仁京遺跡の真ん中、瓶原の自作農の二男坊に生まれ、自宅通学の可能な府内の中学を受験するも失敗、気分を一新して長姉夫妻の住む滋賀県八日市の県立八日市中学に合格し、長姉宅に下宿している日々の異変だった。

新学期に入ったばかりのある日、家督を継ぐ兄から書留便が届き、開いてみると「4月1日付で寫の籍に移し、森家からは除籍したからそのように承知されたし」とあった。

冗談じゃない。血がかつと頭に上った。春休みに帰省したときにも、そんな話は聞かなかつた。「かねて教頭から他府県のままでは困ると言われていた」ともあるが、そんな話も全く聞いていない。第一、本人を無視して人格の根っこを勝手に変えるのは、家族内といえども許せない。

だが、そういう時代だった。義兄から義父となった寫勘次郎は小学校へも行けない貧家から身を起こし、大阪で財をなした成功者だったが子供には恵まれず、一方、実兄は先祖伝来の地をいかに相続し、弟妹の身をいかにして立てるかに責を負っていた。旧弊なりに最善の仕置きと考えたことだった。

義父は、輪かけて旧弊かつ固陋だった。「今日から俺がお前の父だから、お父さんと呼べ」と強要、下宿の坊やから転じて、絶対服従の息子に落とされた。家業の石炭配送を丁稚のごとく手伝えとも命じられる。信正は力に従いながらも、口は真一文字に無口となり、やがてぐれた。遊び仲間を誘い、新地のカフェに乗込んで、エプロン掛けの女給さんを前にタバコをふかし、ライスカレーを食った。

あろうことか、これを知った義父が学校に通報した。これまた義父の正義。職員室での詰問に、心の内では胸を張って、「私が誘い、私がおこり、私が首謀者です」と白状した。処分は退学。仲間間は停学、謹慎だった。ただ、恩情で、3年次修了の免状をもらい、県外校に転校するなら紹介状をくれることになった。

●次姉夫婦に拾われ北野中へ

救いの神となったのは、大阪在の次姉夫妻。とりわけ義兄は懐が深く、「知足」をわきまえ、子供にも子供の人格のあることを当

然とするひとだった。大阪でも有数の菓子問屋を営み、北区堂山に店を構えていたので、そこから通える北野中学の編入試験を受けたところ手応えがあり、4年生に編入できた。

北野中は、既に名門の名を知られ、さすがに義兄も「勉強しいや、田舎とは違うで」と、ただ一言だけいった。本気で、夢中になった。5年生になって、高校選びが話題になるころには何とか300人中100番目くらいにはつけられた。義父は彦根の商業学校を出て家業を継げとしつこく言ってきたが、これは無視、できるだけ遠いところに行こうと思った。

そこへ背を押したのが、岡山出身の級友。「一緒に六高(旧制・第六高等学校)を」と誘われ、当の級友は落ちたが寫は合格できた。そして、これが寫の人生の大半を決めることになる。

旧制高校については、ここで多くをいうこともない。伝説の旧制高校を伝説どおりに堪能し、それはあつという間に過ぎ、1933年、京都帝国大学の哲学科へと進む。しかし生涯の座右にあったのは六高となる。

京大の哲学といえば西田哲学になるが、このへんもまるで語っていない。初め、八日市の自宅から汽車通学したが、事ごとに干渉する義父と衝突、遂に飛び出して、瓶原の森自宅から通うことになり、「籍を戻せ」と意地を張った。

これには実父がまいり、「俺が悪かった。しかし姉(戸籍上は母)の思いも考えろ」と頭を下げた。義理と情。実父に頭さげられては哲学・学徒も、ここらが汐だったのだらう。身は瓶原に置いたまま、戸籍にかかる反骨は鎮めることにした。

代わって京大では、権力の理不尽に何憚るものなく正対することになる。なにしろ、いきなり遭遇したのが、かの滝川事件だった。自著『自処超然』で書いている。

「当時の社会情勢は、昭和6年の満州事変を発端として、上海事変(5・15事件)で時の首相・犬養木堂が射殺され、政党政治が消え、軍部ファシズムが台頭。日本は華北に進出し、長い戦争への道を走り始めていた。3・15事件で共産党は弾圧され、労農組合運動を抑圧した右翼軍部は、京大事件ではその矛先を言論弾圧という形で大学のリベラリストにまで向けてきたのである」

●滝川事件に入れ込む

京大生・寫信正は、事件勃発の5・26集会から反権力の側に与した。ただ身をもって行動を起こしたのは、学内が権力によって陰湿に分断され、言論沈滞となった秋口以降だった。権力に屈して御用新聞化した『京都帝国大学新聞』に敢えて入部し、意を同じくする5人の学友と共に京大言論の復活に努めた。

だが、その集大成ともいえる「滝川事件1周年」を期する記事を組んだところで弾圧に遭った。新聞部の部長(教授)の阻止で一行も紙面化できず、5人は抗議の退部をするに至る。

もとより一度燃えた反骨は収まらない。紆余を経て、退部した学友を軸に先輩、OBたちの助力も得て、学生自身による学生雑誌『学生評論』を創刊した。創刊号は滝川事件3周年の1936年5月26日。滝川幸辰・元教授はじめ京大リベラルの論考が並び、事件後京大の現状を痛烈に批判した。雑誌は学外、他大学の学生

らの支持も得、翌年5月まではなんとか刊行されたが、その後特高（特別高等警察）によって潰されるに至る。

●見習生で大阪毎日新聞入社

1937年4月、京大を卒業とともに大阪毎日新聞社に見習生として入社。見習生とは、1年後に正社員になることを約束された特別待遇組で、当時は3年か4年に1度、数人が採用されていた。寫のときは5人で、東京でも何人かが採用されている。（東京には、大阪毎日新聞社が吸収合併した『東京日日新聞』があり、半独立の形で発行していた）。

当時の採用形態は無茶苦茶と違ってよく、同じ仕事をしていながら、雇員、雇生、準社員などさまざまで、それがそのまま身分差別となり、賃金差別となっていた。最下層は赤伝といって、その賃金は会社の人件費に計上されない。したがって名簿にも載っていない。所属長が物品購入伝票を操作して現金を引き出し、これを流用して賃金に代えていた。この物品購入伝票の地色が赤だったので赤地の伝票、赤伝と呼ばれた。

そんな前途洋々の寫だったが、見習期間の明ける直前の翌年2月、召集、つまり徴兵された。大学卒の場合は、軍の予備士官候補生学校を志願して一般兵卒を免れる手もあったが、寫は兵卒を選んだ。この結果、戸籍のある滋賀県の連隊で半年余の初年兵教育を受けた後、中国大陸の戦火最前線・徐州に配属となったのだが、その過程で奇妙な体験に引き込まれる。

ある日、教育主任の中佐に呼び付けられた。いきなり「近頃はネオンの巷に出入りする亡国学生がいれば、赤にかぶれた売国学生もおる。貴様は後者だろう。そんな奴はさっさと前線へ行つて支那人の弾に当たつてこい！」と、どやされた。このときは京大卒に対するやつかみくらいに思い、右から左にしたが、後になって実体のある怖い話だと思ひ知らされた。

●前線へ飛ばされ、被弾

まず寫二等兵は、実際に戦場で機銃弾を後頭部に受け、九死に一生を得た。徐州・洋河鎮の白兵戦で優位にたち、逃げる敵を追撃、一瞬、後頭部に強い衝撃を受け気絶した。気がついたら野戦病院で寝ており、診断は、後頭部軟部擦過銃創。1センチ違つていたら頭蓋骨を砕かれていたと知らされた。

しかも偶発ではなかったと、後になって分かる。引き金は京大での『学生評論』だった。教育主任の罵倒も偶々ではなく、この一件を、特高を通じて知ったうえでの面通しだった。寫の入営中に、『学生評論』の仲間が反国体と断じられ検挙されていた。もし寫も入営していなかったら検挙されていた。その代わり、最前線配置の連隊を新編成するにあたり、売国学生の寫が組み込まれたのだった。

かといって、寫が反戦兵士だったわけではない。「東洋永遠の平和がもたらされる聖戦の目的完遂」「東亜の秩序創建を阻む頑迷なる抗日軍の徹底覆滅」「徐州周辺に蠢動する残敵の掃討に邁進」といった記事を書き連ねている。己を殺し、無理して書いたという

ふうもみられない。『学生評論』の論調と矛盾するというのは、後世の講釈で、寫も時代の子だった。

兵役は負傷の治療後も続く。さらに満期除隊に際しては現地除隊を願いだした。戦火の中国大陸を放浪しようと思ひ立ち、新聞記者として、人間として、得難い体験を重ね、それなりに実績も積み、また最良の縁をつかんで結婚もしている。だが本稿では、このへん全て割愛し、この先は一気に戦後に移る。

8月15日のことは全く何も遺していない。ただ、敗戦に至るある日、編集局長の吉岡文六と交わした問答には思いが籠っているようなので、その情景を写しとっておこう

「もう負けは分かっている。こんな戦争は即刻やめるべきだ。竹槍で本土決戦など愚の骨頂だ」

「この馬鹿者、支那で何をしておった。日本人を見るあの目つきが分からんか。東洋鬼、親の仇、必ず仇を打ってやるぞというあの目つき。あれこそが支那を物語っている」

「……………」
「日本人も本土に米軍を迎えて戦えば、お前も死ぬ、俺も死ぬ。しかし何人かはきつと生き残る。その時の日本人の目つきに根性が出るんだ。この馬鹿もん」

「……………」
受け止めようは、さまざまになる。寫も「……………」だった。そして実際に敗けたあとの風景は違つて見えた。

米軍が上陸して来たら生き残つた日本人は男も女も「白眼をムク」どころか、誰も彼もが微笑み、米軍のジーブに驚嘆し、甘い

ものに飢えていた日本人はチョコレートに感激し、街頭にはパンが溢れる始末であった——と自著に記している。

●戦前と戦後のけじめ

敗戦を挟んで、持ち場が東亜部から政治部にかわつた。かわつたというより、大東亜戦争と共に肥大化した東亜部だから敗色とともに仕事がなくなつた。だからというわけでもないが、政治部では居候の扱いだった。あてがわれたのは外務省で、外交そのものが勝者任せの開店休業だったが、ポツダム宣言からミズーリ号上の降伏調印まで、歴史上の出来事を、日本国内では一番近い所で見る事が出来た。

半面、当時は如何せん、紙がない。朝刊が2ページ建て、つまり裏表の1枚だけで、夕刊など出そうにも出せない。書いても載らない、載つても骨だけ、書き手にとっては戦時統制とは趣を変えての欲求不満の日々でもあった。

そこへ舞い込んだのが、「敗戦に至る昭和の真実を書かないか」という小さな出版社からの誘い。何人かの耳を巡り巡つて、森下春一の耳に入ったところで一気に具体化した。

森下は寫の六高、京大、東亜部を通しての先輩。寫のほか安東重紀、金子静男、磯田勇、赤谷達、宮澤明義、三上正良の計8人で手分けし、社会部長・森正蔵の名で出版した。これが戦後、伝説の大ベストセラーとなつた『旋風二十年 解禁昭和裏面史』上・下（鱒書房1945年12月刊）となる。GHQから個々の出来事につき真偽確認の照会がくるというおまけもついた。

『旋風』の編纂・執筆は、寫自身にとっても、「戦前」にけじめをつけ、「戦後」を生きる覚悟ともなった。振り返れば、1937年4月に入社して以来、8月15日までの8年余のうち、6年を中国大陸に、後の1年をフィリピン・マニラで過ごした。生活と仕事そのものが大東亜戦争だったことになる。

言い方を変えれば、侵略者の側に立ち、侵略者だとの自覚を持たないまま侵略地で過ごしてきたことになる。人間、なかなか割り切れるものではない。ただ、時代が変わったことだけは痛く骨身に染みた。そして権力には必ず間違いが潜む。そこを見逃してはいけない。それは生来の反骨と重なって戦後を生きる新聞記者・寫信正の原点となった。

『旋風』と前後して執筆にかかっていたと思われる共著『聯合國の日本管理方策』（1946年9月25日刊）の一節では

「再建日本の偉大なる民主主義革命は外力のみによって完遂するものではない。それはあくまで日本人民自らの手によって始めて成し遂げうるものだ。現在の日本にとって革命的なマツカーサー指令はあくまで日本民主革命への根源的発條に止まる。輝かしい民主革命の擔ひ手は労働者、農民、勤労者層を主体とした日本人民大衆でなければならぬ」

——と昂っている。

おりから元旦には天皇が現人神（あらひとがみ）を否定した「人間宣言」を發し、間をおかず軍国体制下の要人が公職追放され、日を追って新憲法論議が起り、男女同権による新選挙制度による総選挙が控えているという時世にある。

32歳、新聞記者。昂らない方がおかしいという世情にあったが、時に一本気となる直情がよく現れている。

あとは、本編本筋ともかわるので、寫のたどった足どりの概略をなぞっておく。外務省のあとは厚生省の担当となり、さらに厚生省から労働省が分離されると、比重は次第に労働省へと移った。なにしろ労働省はポツダム宣言で謳われた戦後民主化を息づかせる最前線になるからだ。根幹となる労働三法の制定から労働組合の育成、これを端緒の端緒から見えていくことになる。

裏腹で外せないのが共産党。戦後・共産党が「アメリカ軍は解放軍」との第一声を上げれば、GHQも「共産党員は、占領軍が排除を命じた勢力と戦ってきた唯一のグループ」（オブラー談話）と応じてみせる、そういう間柄だった。

実際には、すぐに矛盾が露わになって、アメリカは反共、共産党は反米の本音が表に現れ、冷戦の日本版になる。ただそのなかでも互いに互いを利用しようとする底意もあって、新聞記者としては目を離せない対象だった。寫も、ここは心得て懐深く入り込んで取材し、社内にあっても労働行政に明るく、共産党にも強いという評価を得ていった。

●労働組合では「左派」から発言

あわせて、もう一つ外せないのは、新聞界の民主化と労働組合運動の絡みだ。同時並行と言った方がいいかもしれない。寫は、この分野にも強い関心を持ち、実際にも動いている。これも先へいって別章を建てることになるが、寫自身の言葉によれば、寫は

一貫して左派に属した。

逆に寫のいう右派とは「出世主義、官僚主義の弊風が漲り、他人を陥れて自分だけがいい子になろうとする茶坊主たち」のことであり、この連中から「左派」とレッテルを張られたので、「じゃあ俺たちは左派だ」ということになった。

敗戦直後の労働運動は、GHQの強い挺入れもあって活発だった。初めの潮流は、企業の枠を超えて全労働者は団結し、その総力をもって全資本（総資本）に当ることで全労働者の生活を築き守るという理念に基づいた。これが「産別」であり、新聞分野での「単一」だった。

これに対し、逆の潮流もほどなく現れる。企業の自由競争を前提に経済活動が展開される現実社会にあつて、企業の枠を超えるのは現実的でないとの反発だ。これが「産別」「単一」を内部から崩壊させる動きとなる。震源が労働側自身にあつたのか、企業側の挺入れによる別動隊にあつたのかは議論があるが、これが寫のいう「右派」になる。

寫は、確信をもって「左派」を支持し、労働組合の場でも代議員となつて発言している。それは、労働行政を取材する中で得た妥当性に照らしても「左派」の考え方が全うで理になつていてと理解できた。いや、それ以上に、「右派」はやり口が薄汚れ、戦前から戦後に至る日本を誤らせた勢力と重なつて見えた。

そんな「左派」に慣れた寫だったが、1950年6月の参議院選挙を機に、持ち場が右寄りの民主党担当にかわつた。民主党は戦後保守の中では中道を謳い、社会党と組んで政権を握つたこと

もあつたが、1949年1月の総選挙で議席を124から69に落とし低迷していた。

とは言え、この選挙で絶対過半数を確保した吉田茂の民主自由党（264議席）に対しては野党第一党であり、その抵抗ぶりは寫の反骨には似合いだったかもしれない。担当が変わっても深堀取材は変わらず、社内の口さがない雀からは「寫も共産党から中道左派に鞍替えした」と冷やかされてもいる。

折から追つていたのは、地方税法の制定。1949年9月のシヤウプ勧告によつて惹起された税制改革の一環で、戦後日本の税制の根幹にかかる重要法案。庶民からみれば負担がきつくなるのは明らかで、その参議院審議が会期末の大詰めに来ていた。民主党の中でも政府原案に同調する議論と野党連合を重視する議論が拮抗、寫にとつても目の離せない連日を送つていた。

その忘れもしない7月27日、折からの豪雨の中、芝の八芳園で開かれた民主党最高委員会の模様を取材し、帰宅したのは翌日の午前1時をこえていた。夜が明けるとこの日も早出して参議院に直行し、審議の合間を縫つて原稿を書き出しているところへ、政治家部長からの電話が入つたのだつた。

【注】

- ・ 出典Ⅱ主として寫信正の自著『自処超然』による。本稿8ページ参照。「自処超然」の語は勝海舟の語録の中から、漢学者の内藤雋が選び出し、のちに寫らが設立する『東急沿線新聞』の創刊に際して贈られた。書道歴数10年の妻・静（書号・春听）が揮毫した。
- ・ 瓶原（みかのほら）Ⅱ通学した恭仁尋常小学校は恭仁宮大極殿（麩

京後は山背国分寺金堂)に隣接する。現・京都府木津川市加茂。

・次姉夫妻Ⅱ義兄は北山河。俳人としても知られ、『大樹』同人。晩年は死刑囚に俳句を教え、したわれた。次姉・しなは、そんな山河に代わって商売を含む一切を仕切り、明るさを家風とした。

・六高Ⅱ旧制高等学校ナンバースクールの一。岡山市在。3年制。実質上、大学進学を保障されていたから、読書に談論に体験に、多少の破目外しも許されて、自主、自治の青春を謳歌した。

・滝川事件Ⅱ京大法学部教授・滝川幸辰が文部大臣・鳩山一郎によって休職処分とされた弾圧事件。教授の刑法思想は客観的自由主義に拠っていたが、急速に右旋回していた政官界はこれを敵視し、鳩山はこれを背に京大総長以下の総意(休職反対)を押し切った。

大学の自治を侵し、学問の自由を奪う弾圧として京大はもとより全国にわたる画期的な抵抗運動となったが、卑劣な分断工作によって終息に至り、これを機にファシズム化の嵐は一段と強まった。

・特高(特別高等警察)Ⅱ大逆事件後の1911年8月に警視庁総監官房に「特別高等警察課」として設置したのが最初。その後、全道府県に拡大した。初めは治安維持と防諜を主としたが次第に国民生活全般を監視、摘発する強権機構となった。組織上は警視庁、各道府県警察部および所轄署に所属したが、実態は内務省警保局直轄の中央集権体制下にあった。戦後、GHQ指令(10・4覚書)によって解体されたが、実態は公安警察部門に引継がれている。

・一社二題号Ⅱ東京進出を狙った大阪毎日新聞社が、1911年、東京日日新聞社を吸収合併したが、題号はそれぞれの『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』を用い、旧来どおりの発行体制を維持した。1943年元旦を機に官意をうけて、題号を『毎日新聞』に統一、社名も毎日新聞社に改めた。

・二等兵Ⅱ帝国陸軍の階級で兵の一番下位。一等兵、上等兵、兵長と昇進し、この上が下士官で伍長、軍曹、曹長。

・現地除隊Ⅱ兵役満期になると、召集地(本籍地)に還って除隊となるのが原則だったが、本人の意向が認められれば、所属部隊の現在地での除隊が認められた。崑の場合は滋賀県で召集を受け、北京の軍報道部(出向)勤務で満期を迎えたが、一旦、原隊の駐留する徐州に戻り、現地除隊を認められた。

実は、被弾後の崑が徐州の原隊に復帰していたことを毎日新聞入社同期の金子静雄が知り、北京支局に居た同じ同期の今泉正浩に伝え、今泉が支局長・渡瀬亮輔にかけ合い、渡瀬が軍報道部の浜田大佐に頼み込んで、北京出向になった、という経緯がある。このとき奇しくも渡瀬は命の恩人の一画にいたわけで、後年の解雇通告の当事者になるとは、二人とも思い及ばない。

・北京で結婚Ⅱ相手は北京市女子第一中学・高等学校の日本語教師をしていた和田静、29歳。1942年2月、北京で挙式したが、義父は、これも認めず、長男・信彦が生まれた(5月5日)あとの、7月7日になって、ようやく母子同時入籍となった。この間、おそらく次姉夫妻が中に入って、和解のお膳立てをしたと思われる。

・吉岡文六Ⅱ崑の東亜部を通しての上司。「軍の参謀の相談役」といわれた陸軍通で知られ、敗戦直後、辞表を書いて郷里の熊本に蟄居した。のち公職追放される。1945年4月4日現在の編輯関係職員録(東京)に「編輯局長(理事)」とある。

同職員録には応召(徴兵)中、徴用中の部員には印があり、政経部では50人中13人(うち徴用1)、社会部で66人中23人(同3)が兵役、使役についていたとわかる。崑、三上正良は東京外特派中のためか、載っていない。

・ミズーリ号Ⅱアメリカ海軍の戦艦。東京湾に停泊し、ポツダム宣言受諾の降伏文書調印の式場となった。

・『聯合國の日本管理方策』Ⅱ金久保通雄との共著。ジープ社(二木秀雄)刊。ポツダム宣言から始まる占領軍(GHQ)の発した命令・

指令をテキストに占領行政の骨格・目的を読み解いた手引き書のような著作。金久保が序論・総論を担当、寫が各論を担当、ポツダム宣言はじめ占領行政にかかる主要命令・指令・関連文書46点を収録している。

- ・二木とは、寫のマニラ勤務時代に知り合った主計中尉を介して出会い、二木の興した雑誌『政界ジープ』でも協力しているが、のち、二木が元731部隊所属の軍医で、戦後はGHQの諜報部門に深く関与していることを知り、訣別している。この故か、本書については『自処超然』でも全く触れていないが、一冊だけ手元に保存していた。二木は「政界ジープ」恐喝事件で有罪・服役している
- ・労働3法Ⅱ労働組合法、労働基準法、労働関係調整法。

・オプラー談ⅡGHQ民政局法制課長 Alfred C Opler 『戦後史の汚点』108ページから引用。原典は『日本占領と法制改革』（日本評論社1990年刊176ページ）

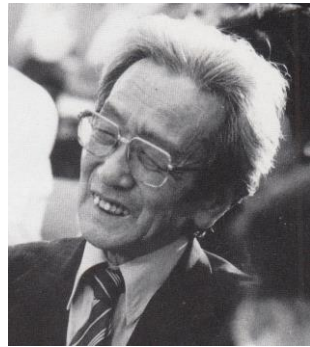
・シャウブ勸告Ⅱ米コロンビア大教授のC・S・シャウブを団長とする税制使節団による税制体系にかかる「日本税制報告書」。1949年9月15日、GHQが正式発表し、マッカーサーから吉田首相宛ての書簡で、実施に向けての政策立案を指示した。

【用語】

・差別用語Ⅱ軍教育主任（中佐）の罵声や新聞社上司の怒声の中に中国人および中国への差別用語が含まれているが、発言そのものに絡みついており、分離、言い換えは不自然にわたるので、差別意識そのものと認識のうえ、原文のまま収録した。同じく、敗戦直後から一時期流布した差別用語も原文のままとした。

- ・『寫刊』Ⅱ『自処超然—一生貫いた反骨・反逆精神』
- ・『戦後史の汚点』Ⅱ『戦後史の汚点 レッド・パージ』

三上 正良 (みかみ・まさよし)



に新聞記者がいたのが縁になる。

実は三上正良の生立ち情報は少ない。新聞記事はもとより膨大な評論等の論考を寄稿しているが、自身について書いたものはとほしく、語ったことも少ない。ときに聞かれても、「ま、いいじゃないか」が口癖で、客観記録も見当たらない。幸い、半生の人徳から、没後、仲間たちによって追悼集『信念のジャーナリスト 三上正良』が編まれ、それが、ほとんど全てとなっている。

よって、本稿も、同書に収録された断章を孫引きし、あるいは再構成して全体像に近づけるべく試みた。本稿を端緒に訂正、補充はもとより、更なる発掘が寄せられるよう願ってもいる。

●北海道は鉄道が動脈

戸籍上の本籍は、道央・旭川から北端の稚内に向かう途中の名寄で、地味の豊かなところではない。大胆に踏み込めば、父母あ

るいはその先代が開拓農家として渡道したものの、後進組ゆえの辛酸を重ねたあげく土地を諦めて鉄道員に転じたか、あるいは三上の父系が二、三男だったため、街に出たとも考えられる。

岩見沢は鉄道の要衝。東へ旭川を経て北の玄関口・稚内に至る稚内線、同じく旭川を経て網走に至る石北線、旭川の手前・滝川から帯広を経て釧路・根室に至る釧路線、南へ苫小牧を経て室蘭に至る室蘭線、西へ札幌・小樽を経て函館へ至る函館線と、北海道の鉄道網を束ねた形になる。

長々と西村京太郎なみとなったが、俯瞰図となつて、三上正良の意識下に潜在し、行動半径となつていく。加えて岩見沢が要衝となつたのは偶然ではなく、周り一帯が夕張はじめ北海道有数の産炭地だったことによる。自前のエネルギー源である石炭を集積し需要地に送り出すのが北海道の鉄道の使命だった。

北海道の開拓は、鉄道が動脈を担ったといつていい。道内各地の資源・物産を運び出すと同時に、無人の原野に鉄道を敷くことによつて開拓民を誘導して集散拠点を造り、広大な未来図を描いた。最盛期には、大雪山をど真ん中にして大環状線がぐるりとめぐり、その大要衝の一つが岩見沢だった。

その岩見沢で、正良の父親は検車区に勤めていた。大拠点・岩見沢には列車を編成する大操車場があり、機関区、保線区、運輸区、車掌区等と共に、貨車、客車を整備する検車区があった。もう一つ踏み込むと、ここで正良の父親は助役（区次席）級以上の中間管理職だったかもしれない。

当時、現場鉄道員のほとんどは現地採用の終身雇用で、転動も

稀だった。また、ほとんどが尋常小学校を出たか出ないかで、その子供たちもせいぜい小学校高等科を出ると働きに出た。旧制中学に進学するのは、区長さん助役さんたちの中の優秀な子供たちだけで、中学出は地域のエリートだった。

これは、正良の父親が転勤を重ねる職域にいたことからの推測になるのだが、憶測の材料はもう一つある。正良が6人兄弟の長男だったことだ。当時はみな貧しく、兄弟の多い家では、長男は親を助けて幼くして働きに出ることが多かった。そんな世情のもとで正良が進学できたということは憶測を裏づける。

●新聞記者になりたし、職はなし

室蘭は鉄の街で港町。西の八幡と並ぶ、北の溶鉱炉が赤々と燃えていた。後年、「石炭の積み出し港で、外国船も出入りするところから、先進的で開放的な港町。時代の風波をまともにかぶる印象的な町でした」と、同窓会誌に描いている。

そんな活気の街で、三上は水泳部に入ってキャップを張ると共に、啄木に夢中となつて級友らと短歌誌『脳病院』を編み、さらには社会科学研究会にも加わっていく。けつこう多感で、ませていた。そして、新聞記者も、この環境から視野に入ってくる。同期の大友福夫（専修大学名誉教授）によると

「水泳部だったことがきっかけだ。（同じ同期の）大島清君の兄で（室中卒の）牧田吉太郎さんが、明大出て北海タイムスの記者になった人だが、帰省の折に室中の水泳部の指導をして、その縁で、三上君が卒業して職のないとき、牧田さんの世話で新

聞記者の見習いをやった」

——というようなことを話している。

街に、職はなかった。世界恐慌の真つただ中、「大学は出たけれど」(1929年)の失業、就職難の世情が続き、その上、三上は4・16事件(第2次共産党大量検挙事件)にも引っかけた。中学の社研活動で目をつけられたのだろう、未成年ということで警察の演武場へ一夜とめおかれ、説諭と警告で放免されたが、以後レットルは付いて回る。

大友福夫の言う「見習い」が、いつ、どこでのことか、もひとつ定かでないが、1931年3月、室中を卒業できたものの、三上に職はなかった。追悼集の編者が本人から漏れ聞いたところでは、室蘭製鉄工場の工場新聞『ひびき』の編集を手伝ったり、冷害に苦しむ農村をめぐるのオルグの日々だったようだ。

重工業の室蘭から冷害の農村というのも唐突だが、あるいは特段の思い入れがあったのかもしれない。それは、後年、娘たちに子供時代のことを「長い雪道を歩いて学校へ通った」としみじみ語ったことがあったからだ。検車区は岩見沢とか室蘭とか大きな拠点にしかなく、そこには近接して鉄道官舎があり、街中だから学校も遠くなかった。となると、父親が鉄道員となる前は、長い雪道の貧しい農村で頑張っていた気配が伝わってくる。

●「特高月報」に記録

そんな三上に、特高の記録があると分かった。追悼集の呼びかけ人の一人・福谷保夫が、三上本人から「満20歳になったとたん

治安維持法で逮捕された」と聞いたのを思い出し、国会図書館で3年分くらい「特高月報」をしらみつぶしに当たっていったらどんびしやで出てきた。

昭和10年1月の綴じ込みに

「昭和9年5月4日検挙、7月23日起訴」

——とある。

かいつまむと昭和8年6月に全協加入、同年9月に帯広地方オルグ、同年10月に全十勝無産団体協書記と記されている。昭和8年(1933年)ならば、卒業の2年後。おそらく就職することなく、労農運動の現場に入っていたのだろう。記録は、当たらずとも遠からずに違いない。全協とは日本労働組合全国協議会の略で、モスクワに本部があるプロフィンテルンの日本支部。近づきだけで治安維持法による検挙の対象となった。

この後の足跡も『北見市史』に残っている。これもかいつまむと、帯広合同労働組合にいたところを、道内北東部の拠点都市・北見(当時は野付牛町)で新聞販売店を営んでいた叔母から、手伝ってほしいと頼まれたのが、その発端になる。

しかも移り住んだとたん、特高に呼び出され、そこで地域活動をしていた景川弘道と知り合い、意気投合して、北見商工会書記・福島豊宅での週2回の社会主義研究会に発展したというから、特高に取持ってもらったようなもんで、手間が省ける。ついで、いくつかの争議に関わるなかで信頼を得、全協北見準備会づくりに発展したところで、検挙となった。

どうも、室蘭時代の後輩の中にスパイがいたらしい。検挙のあ

とは、特高のやり口で、北見、小樽、室蘭、岩見沢、札幌と留置場をたらい回しされ、最後は札幌刑務所の未決房で執行猶予の出獄となった。裁判の記録は見つかっておらず、本人の記憶も定かなく、出獄の日時も分からない。

●出獄後に結婚

1937年には、1911年生まれに加藤文子と結婚しているから、その前の出獄は確かだ。縁は語られていないが、文子も鉄道員の子で、母は正良と同じで継母だった。当時は、継母、継父というのはそう珍しくない。というより、夫に先立たれた妻は後妻予備群に入り、妻に先立たれた夫は、男やもめに蛆がわくと言われ嫌われた。世の仕組みが家族単位を強要されていて、特に女性には結婚することが生きていくすべにされていた。

文子と正良が、恋愛結婚でなかったことも確かだ。文子はアカ嫌いで、正良の思想には嫌悪感を隠さなかった。それは生涯続いて、後年も、受話器をとって、『アカハタ』の編集局からと分かる。受話器を打ち付けて切ったという。それだけ国家によるアカ嫌い教育が浸透していたということでもある。

かといって、夫婦仲が悪かったわけではない。むしろ夫唱婦隨の典型で、金銭生活力のない正良が解雇されてからは糟糠の妻の典型となって、正良には常にいい身なりを保たせ、やりくり苦労を重ねて愚痴もいわず、正良に先立つこと10年、70歳で先立つた。そんなふうには、娘たちは追憶している。

とまれ、出獄後は、これもどんな縁か定かでないが、念願だっ

た新聞記者になっている。それも1年足らずの間に、室蘭、函館のローカルから小樽新聞の札幌支社、そして東京日日新聞（現・毎日新聞）の札幌支局へと渡っている。おそらく昨今でいうパートかアルバイトのような形だったのかもしれない。

●東日の札幌に入社

東日との契約も定かでないが、解雇されるまで継続しているから相応の保障があったと思われる。後年、「その頃の本社の政治部長は室中先輩の高橋司三治さんだった」と漏らしているから何らかの口利きもあったのかもしれない。ちなみに、高橋は、三上が解雇通告されたとき、西部本社（福岡県）の編集部門トップである編集総務に就いていた。

東日に入って1年か、そこで、兵役にも取られた。ノモンハン（中国とソ連の国境地帯）での惨敗（1939年5月）があった頃で、当人は、このため急遽、動員されたと思っているが、札幌近郊の月寒兵舎で初年兵訓練を受けただけで、4カ月後に復員している。これも当人は「毒ガス兵の訓練を受けたが、特別待遇」で前線には出されなかった」と言っているが、「特別待遇」なるものが何だったかは明かしていない。

この間、三上も「幹部候補生」（下士官養成？）コースへの志願を強要され、拒否している。これへの制裁なのか、3日3晩立ち尽くすしごきにも遭っているようだ。前後して入営した寫信正が大陸戦線に飛ばされ銃弾を浴びたのに比べると幸運だった。

兵役は短期で済んだ三上だが、思うところあったのだろう、真

珠湾奇襲で太平洋戦争に突っ込むと、志願して従軍特派員になった。危険と背中合わせながら、当時の新聞記者としては花形でもある。志願したからと言って誰もが行けるわけでもない。入社早々ながら、相応の実績と評価があつてのことだと思われる。

毎日新聞（東日も含む）は、このへんで少々面白い新聞社でもある。採用においてはやたら縁故が横行するが、入ってしまった縁故の効能はあまりなく、実力が実力として通用する。見習生出身でも下手な原稿は没になり、アルバイトが書いた原稿でも上等なら大きな活字になった。三上も、そんな位置にいたのかもしれない。特派されて書いた原稿もなかなか読ませるものだった。

●特派先で特ダネ

特派されたのはジャワ、ベトナムの南方戦線。「ジャワ島上陸作戦」など、勝った、勝ったの戦闘記事だけでなく、「銃後への慰問袋逆送物語」といった、目線が並みとは違う記事をものにしていく。慰問袋とは、戦地の兵へ故国の家族や篤志が故郷の匂いや思いを込めて送る贈物だが、逆に、戦地の市場ではふんだんに手に入る砂糖、甘味、純綿服地、皮革、肉の缶詰、粉ミルクなどを詰めた故国に送る兵らの家族愛を伝える記事だ。それだけ銃後は窮乏し、貧家の出である兵らが痛感していたということでもある。

半面、目線の違いは、身に危険も招く。戦線は次第に泥沼と化し、占領地の施政も混迷していった、ある日、北海道庁から招かれて、司政官として南方へ出向する道庁部課長らを対象に現地模様を話したところ、現地政策を批判するかの部分を耳ざとく聞き

取った者（あるいは私服特高）がいたのかもしれない。たちまち憲兵隊に引き立てられ、3日にわたって締め上げられた。

本人以上に驚き慌てたのが支局の幹部。本社に手配を頼み、三上を茨城県土浦の通信部に配転した。ここなら、霞ヶ浦の海軍航空隊があり、海軍記者となって出入りするようになれば、もともと仲の悪い陸軍と海軍の反発し合う空気の中で、陸軍・憲兵の手出しも避けられるとの読みもあった。

三上31歳。9歳と3歳の娘、そして三女となる子が文子のお腹にいた。

●再び戦地へ、敗戦

だが、なぜか三上の血気は高い。既に敗色濃く、先に敗戦国となったドイツの特派員らがシベリア鉄道経由で帰国することにもなった。満州（中国東北部）はどうなっているのか。志願したのか、打診されたのか、再び特派員となって新京（現・長春）へと単身で向かった。そして程なく敗戦、8月15日は鴨緑江の南岸で迎えた。

関東軍司令部は、既にソ連軍の侵攻（8月9日）を受けて朝鮮国境に近い通化の山中まで退却、開拓民を見捨てていた。特派員連も、司令部に付いて南下し、さらに一度は鴨緑江を南へ渡ったものの、一部は残してきた家族らを救出するために北へとつて帰り、家族と合流して河を渡り直し、平城から京城（現・ソウル）と南下し、釜山からポンポン蒸気船のヤミ船に乗り合わせて北九州の若松港にたどり着いた。既に敗戦から2カ月を経っていた。三上

も司令部とは離れ、この一行に同行している。

●政治部で社会党を担当

東京本社に戻った三上は、特派員の母体である東亜部に属したあと、すぐ政治部に移る。土浦で留守を守った家族を呼び寄せて板橋の、たぶん借上げ社宅に住んだ。政治部では、はじめ内務省を担当し、あとは国会、政党を担当し、社会党へはかなり食い込んでいたようだ。鈴木茂三郎、浅沼稻次郎らとの親交は、解雇後まで長く続いている。

取材力のある書き手だったことは確かで、先に嶋信正の項で紹介の『旋風二十年』の同士9人の中にも三上正良の名がある。だが、その後の動静は、自ら語らなかつたこともあるが、戦前以上には乏しい。最晩年の論考に「1945年8月から1、2年、私は新聞記者として懸命でした。戦前の記者時代との違いをはっきりさせるような記者活動をしたかった」とあるから、本人も未達成感をかこっていたのかもしれない。

労働組合活動の面では全く痕跡がない。ない、ない、ない。後の章で紹介する、『梶谷編刊』では、毎日新聞の項を三上が担当しているが、全くの客観記述に徹しており、(記述自体は、当時として過不足のない第一級の史料となつているのだか)当事者である自身の関わりについては一字一句もない。したがって、7月28日に三上がどこにいて何をしていたのか、解雇通告の状況も分からない。

【注】

・出典Ⅱほとんど追悼集『信念のジャーナリスト 三上正良』によつてゐる。本稿8ページ参照。

・同窓会誌Ⅱ室中十期会誌。1982年6月に創刊1号

・4・16事件(第2次共産党大量検挙事件)Ⅱ1929年4月16日、東京など3府30県と台湾にわたつて、市川正一、鍋山貞親ら1600人余が検挙、339人が起訴された。前年3月15日の10000人余検挙に次ぐことから第2次と呼ぶ。

・「特高月報」Ⅱ内務省警保局が発行し、厳秘扱いで部内配布した。戦後、複製版が政経出版社から刊行されている。

・全協Ⅱ日本労働組合全国協議会。プロフィンテルン(本部モスクワ)の日本支部として1928年結成。綱領に「天皇制廃止」を掲げ、加入しただけで、治安維持法違反の対象とされた。1937年ころまでの活動痕跡がある。

・『北見市史』Ⅱ「歴史編・戦時下統制」(執筆者・小池喜孝)の項に三上らの関わつたくだりが詳述されている。執筆者の小池喜孝は東京出身の社会科教師で、東京でパージされたあと、道立北見北斗高校の教師になつた。第四部で再登場する

・札幌支局Ⅱ編輯関係職員録(東京)によると、地方機関で記載されているのは支局長だけで、あとはない。あるいは、支局長は支局経費によつて支局長が現地採用していたのかもしれない。1945年4月4日時点の支局長は佐藤三郎。

・ノモンハンⅡ中国東北部のモンゴル人民共和国、ソ連との国境に近い地。1939年5月、国境紛争からソ連軍と戦端を開き、惨敗した。国は惨敗の事実を隠し、帰国した負傷兵にも口外を禁じた。

【用語】

『三上追悼刊』Ⅱ『信念のジャーナリスト 三上正良』

土井 正興 (どい・まねおき)



提供・朝日新聞社

たがって生まれは東京・渋谷ながら育ちは姫路、体育教師の子ということになる。

正興の生まれた前年には関東大震災。1年後には普通選挙法と治安維持法が抱き合せて成立。飛んで、イタリア・ポンペイの遺跡ではスパルタクスを描いたフレスコ画が発掘されるなど、後年、次第に歴史好きとなっていく正興には外せない出来事が集中して、誕生の周辺を彩っている。正興の正は、時の元号・大正の正、興は、震災復興の興を指すというのが本人の理解だ。

さらに続いて、尋常小学校に入学した翌年の1931年には満州事変、旧制中学に入った1937年には日中戦争、卒業する1941年には太平洋戦争に突っ込んでいく。予備役といえども軍人は軍人。交流のあった真崎甚三郎や山下奉文の消息が家庭での話題となり、軍関係の冊子なども頻繁に舞い込むようになった。

当時は理解の外ではあったが、振り返ると「国防の本義と其強化の提唱」(陸軍省新聞班)「大日本青年党綱領」(橋本欣五郎)から、村中孝次・磯部浅一の「肅軍の意見書」などがあり、ばらばら捲って眺めた記憶がうっすら残っているという。「昭和維新」現状打破「革新」といった言葉が刺激的で、共感も覚えた。

●旧制高校の風に馴染む

父は旧制高校の教師であり、剣道の師範でもあったから、高校生たちが始終自宅へ出入りしていた。姫路は新参組だったが、生徒の方には「〇高」という既視感が培養されているから、たちまち伝統校と変わらぬ気風が定着していった。剣道部の生徒は、師範を「おとうサン」と呼ぶ感じで「土井サン」と呼び、厳しい稽古の中にも親しみを醸し、また弊衣破帽で哄笑するさまは、たくまずして正興の憧れとなっていた。

いや、もう一つ外せない世間の風がある。アカ、だ。まだ学齢に達する前だったが、姫路高校にも左傾思想にかかる警察の手入れがあり、1週間に及ぶ同盟休校事件(1929年)があり、後年、自民党の派閥領袖となる河本敏夫らが退学になった。これらが契機となったのであろう、父母らの日々の会話の中でも「アカ」がしばしば出てきて、正興の耳にもこびりついた。

「頭がいい子にはアカが多い」きょう、アカがまた引つ張られた「云々の類の、当時よく交わされた常套句で、その声音がいかに嫌悪感にみち否定的に聞こえた。きつととても悪い事なんだと子供心にも浸透していった。もちろん、これは後年になって振

り返った遠いむかしの記憶である。

本気で歴史好きになったのは、小学校3年になってからだ。それまでは「里見八犬伝」とか「真田十勇士」とか、英雄譚とか冒險譚を通しての興味だったが、担任に師範学校を出たばかりの若い島田清先生が就いて、地元郷土史の教材を使って身近に教えてくれたり、観察と称して地元地域を歩き回らせて調べる楽しさを教えてくれたのが新鮮だった。実をいうと、小学校に入る時、姫路師範の附属校を受けて失敗し、子供なりに挫折感を背負っていたのだが、それも払拭できた。

とはいえ、依然、『少年倶楽部』の愛読者で、山中峰太郎の「星の生徒」や平田晋作の「昭和遊撃隊」、あるいは楠木正成ら天皇中心の忠臣物語に夢中となり、とりわけ陸軍幼年学校の日々を熱く描いた「星の生徒」には憧れた。

ちなみに、陸軍幼年学校は実際に受け、落ちている。学科はなんとかだったが身体検査で刎ねられた。極度の近視が理由だったというから、読書量の多さが加重したのかもしれない。もう一つ弱いのは算数で、このため受験そのものが苦手、旧制中学へも小学校高等科を経て地元の姫路中学に滑り込んでいる。

●江口先生と禪問答

中学では、2年生のとき、西洋史の先生・江口朴郎に教わったのが一番の収穫になる。振り返って右左を言えば左なのだが、当時は既に日中戦争のさ中、国体護持以外は法度で、大陸での戦争は大東亜共栄圏を打ち立てる聖戦になっている。そんな中で歴史

の真実を教えようとすると、どうしても奥歯に挟まる。

しかし、そこが正興らには新鮮だった。物事は、そうそう通り一遍じゃないと予感される。例えばこんな具合になる。

「先生、正義は勝ちますか？」

「必ず勝ちます」

「じゃあ、日本は勝ちますか？」

「負けても大したことはありません」

「？……」

正興らは、これを「江口の禪問答」と呼んだ。いま振り返れば明らかで、正興らは聖戦を前提に正義といているのに対し、江口は政治思惑を排した絶対正義を言っている。だが、当時の正興らにはこの違いの認識がないし、江口からすれば、分かりやすくかみ砕けば国体批判になってしまう。

そこで、第1次大戦で敗北したドイツを例に、負けた国の復興の様子を歴史として教えようとした。正興らには、禪問答ながらも、万世一系とは違う歴史の読み方があると気づかされ、生来の歴史好きに洞察と理屈が重なるようになった。江口先生とは、この後、舞台を東大に替えて再会し、生涯の師となっていく。

こうして中学時代は日中戦争と共に過ごし、5年生になった暮れには太平洋戦争に広がる。高校は引き続き地元の姫路高校になんとか合格する。父親は既に退官し、中学3年生の暮れに他界していたが、地元進学は他に選択肢のない気分になっていた。

だが憧れの高校生活はもう昔日と化していた。弊衣破帽、談論風発して人生を語り、未来を模索する余裕はなく、日々、勤労奉

仕に明け暮れた。それでも正興自身は合間を惜しんで440冊を
読破している。中で3年生になる正月、母親が亡くなった。これ
は土井の家にとって父の死以上に厳しく覆いかぶさった。

当時(1943年)、兄は既に東大を出て就職し応召して軍。姉
は結婚して静岡高校(旧制)の教師の妻。妹は、地元の高等女学
校の生徒。弟は、これから中学(旧制)。親族会議の結果、妹は東
京在の叔父のもとへ行き、弟は静岡の姉夫婦の預かりとなり、家
はたたんで正興は下宿、一家離散となった。

●繰上げ卒業―休学―軍学校

明けてさらに、最終学年・3年生のとき、戦時措置によって高
校の卒業は9月に繰り上がった。既に米軍はサイパン島に上陸(6
月)し、インパール作戦は壊滅(7月)し、グアム、テナアンは
全滅に瀕していた。学問、勉強どころではない。前年1943年
暮れには第1回学徒兵が出陣し、満18歳以上の兵役編入(194
4年10月)が準備されていた。

繰上げは、正興にとっては幸いし、事実上無試験で東大法学部
政治学科へ進学できたが、選択はもう一つあって、形ばかり大学
生になって兵役動員を待つか、軍の士官促成学校へ入るか、正興
は後者を選んだ。配されたのは、九州・久留米第一予備士官学校
で、ここで6カ月の訓練を受けることになる。

なんとか務め上げたが、成績はかすかす。近視で幼年学校を刳
ねられたうえ、剣道師範の子に生まれながら不器用で、武術は散々
だった。それで任官したのが、同じ九州・五島列島の福江島にあ

る旅団だった。戦時下とはいえ、風光よく、関西等に比べればの
んびりしている。弱兵、田舎で国を護るもいかと納得した。

これがとんだ間違いだったと、これも後になって知れる。福江
島は捨て石だった。既に大本営の好戦派は本土決戦を視野に、時
間稼ぎの捨て石を想定、その一つが福江島だった。

その目で検証し直すと、旅団の兵員は40歳代の老兵が多く、若
いのは成績不良の弱兵。装備も旧式銃が2人に1丁の割で、本気
で竹槍を「武器」というか、玉碎に武器は不要との考え方だっ
た。したがって、指揮官も成績下位を配したのだった。

●長崎の惨禍見て、東京へ

敗戦は、この島で聞き、長崎を経て、まずは学籍のある東京へ
と向かった。途中の長崎では目を剥く廃墟に驚く。後になって原
爆だと知った。しばらくは、「何を考えるべきかを考えるような
日々だった」というが、結局は大学に戻ることにした。

ただ、法学部で政治を学ぶ気にはならない。「せっかく学ぶのな
ら、何でもこういうことになったのか、それを究めよう」と、そう
思った。

やはり歴史が性に合っている。選び直したのは西洋史、法学部
をやめ文学部に入り直した。逼塞の中学、勤労奉仕の高校、捨て
石の軍。大学は全て自由になっていた。

半面、学ぶには食っていかなければならない。父親の遺したも
のは、恩給といい国債といい、全て封鎖されている。これは深刻
だった。

● 占領軍の警備員で学資

住まいは大学が一括して借り上げた元・下宿屋の寮に20人くらいで雑魚寝し、たつきは占領軍の家族宿舍の警備員を得た。24時間勤務で1日交代、勤務日も半分の時間は待機という条件だったので自由時間も十分とれると踏んだ。だが、これも全くもつての誤算。「365日の連続サイクルとなると殊のほかで、気苦労も多く、寝不足が慢性となった」とぼやいている。

食糧は慢性不足。手分けして芋や野菜を買い出し、それぞれが安い電熱器を買い込んで、それぞれの生活時間で雑食をつくって食った。当時は電力事情も悪く、戸別に供給制限量があって、これを超えると罰金が科された。あるときは、それが1万円を超え頭抱えた。貧乏学生の平均生活水準は月1800円。団結して東京電力に押しかけ、免除してもらった。

「個々の自由と生活を確保するには団結するしかない」。これは次第に寮生の共通意識となる。そして土井正興は1949年1月の総選挙で、初めて共産党に票を入れた。「理論的にマルクスを勉強し理解したからではない。生活実感からの選択だった」と明かしている。共産党が4から35へと議席を伸ばしたときだから、同じ選択をした有権者が、それだけいたことになる。

卒業論文は、古代ギリシャのオストラキスモス（陶片追放）を選んだ。「戦後の占領軍による戦争犯罪人の追放を念頭におき、民主政治と追放の関連を論じてみたかった」との思いだ。アルバイトと貧窮生活で消耗するなか、なんとかベロツポの『ギリシャ史』

をドイツ語で読み、マルクスにも触って一応は書き上げた。だが自分でも納得いくものにはならなかった。

それでも大学生活自体は有益だったと思っっている。土井自身の言葉によれば、「自己の殻に閉じ籠り、果報は寝て待て」のタイプだったのが、寮を軸とする生活の中で「世をよくするには多くの友人と共に自分から意識して世に働きかけねばならないし、実践しなければどうにもならない」と気づいたからだ、という。

● でもしかで新聞社へ

なお、迷いはやまない。1949年の春、人より遅れ25歳で世に出たが、職を何にするか。勉強不足の自覚から教師になる自信はなく、人に頭を下げる会社員も嫌だ。じゃあ、ジャーナリストにでもなるよりないか。だが、軒並み刎ねられ、最後はようやくここで毎日新聞社（大阪）に入ることとなった。

ところが入ってみたら、配属は人事。ひとの給料計算が仕事とわかった。月給は5000円でうっかりすると赤字になる。ぶつぶつ言っていたら、「労働組合にでもいって言えば」といわれ、ほんとに代議員に選ばれ、思いきり発言したら、若造の執行部批判と受け取られ、返す刀で販売部への配置転換となった。組合は御用組合だと分かった。

販売での仕事は、販売店へ送る新聞の部数を帳簿につけ、販売店を回る外勤部員との連絡をとること。要は、部数拡張の下働きだ。折から朝鮮戦争が勃発したときには、販売トップの営業局長が「新聞は戦争と共に発行部数を伸ばしてきた。この戦争も絶好

のチャンスだ」といって発破をかけてきたから、呆れるよりも怒りを感じてきた。

●見るもの聞くもの違和感ばかり

この間にも、とんでもないものを見聞してしまった。このころシベリアからの引揚げが続いていたが、赤旗をふって帰る復員兵らの写真の赤旗の部分を日の丸にすり替えて掲載した。しかもそういう「技術」をもつ部員が称賛されている。そこで、土井はそういう操作はしないであろう『アカハタ』を取り寄せ読み比べるようになった。

そればかりでなく、そのころ紙面をにぎわす、公務員や企業の人員整理など労働問題、あるいは下山、三鷹、松川などの怪事件の報道で、後世のいう反共宣伝色が強くなっているのが気になった。加えて、こういう疑念に敏感であるべき労働組合が無関心なものになった。さらには労働界そのものが、産別から総評に傾き、新聞労働組合が経営協調になびき、企業別の新聞労連に寄っていくことに違和感をもっていた。

そんな、ぶつぶつは、販売の職制にも聞こえるようになっていて、土井が、労働組合の代議員選挙で手をあげると、今度は「あいつには入れるな」「あいつと口きくな」と言われてまわられ、それが土井の耳にまで入るようになった。

どうやら、土井の歴史観、いや常識からおかしいと思われる出来事が、この職場ではおかしくなく、土井が異端児にされていく気配が強く感じられるようになっていった。

そのあげくの1950年7月28日午後3時、自席で仕事していた土井正興に営業局長から呼びがかかった。朝鮮戦争で部数を増やせと号令した取締役・営業局長の嶋井辰夫である。

【注】

- ・ 出典はほとんど土井正興の自著『生きること学ぶこと』によっている。本稿8ページ参照。
- ・ 第1次世界大戦後の軍縮は、大戦終結（1918年11月11日）後、建艦競争に陥った時期もあったが、1921年11月のワシントン会議を機に軍縮機運が具体化し、翌22年7月、海軍軍縮計画、陸軍軍縮計画が相次ぎ発表された。土井正興の父親の予備役編入も、この計画の実施に伴う一環と思われる。
- ・ 勤労奉仕は1941年12月1日、「国民勤労報国協力令」が施行され、男子14歳～40歳、未婚女子14歳～25歳、また、学校在学者は中学3年生程度以上の者全てが対象となった。割り当てられた軍需工場等へ出向き、無償で従事させられた。戦況不利とともに、対象年齢、動員頻度が拡大され、とくに中学生、高校生は学校生活の大半が勤労奉仕となった。
- ・ 第1回学徒兵は1943年9月21日、陸軍省の兵役法施行規則を改定し、学生対象の兵役猶予を停止。大々的に学徒出陣を煽り、文部省は同年10月21日、東京・神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会を主催した。これを第1回とし、次々学生を戦場に送った。
- ・ オストラキスモスは古代ギリシャの追放制度。追放したい者の名を陶片（オストラコン）に記し、一定数に達すると追放が成立した。無記名による秘密投票。

【用語】

『土井刊』は『生きること学ぶこと』

小林登美枝 (こぼやし・とみえ)



旧姓・鷺沼、小林登美枝は1916年、大阪に生まれ、ほどなく茨城県土浦に越し、大きな湖水につながる掘割りの近くで育った。父母の生業は呉服屋。みんな貧しく売上の半分は掛け（月末払

い）で、小学生のころから店番や掛取りを手伝った。通りに面したガラス戸はいつも開け放しで冬は寒かった。母に「閉めたら」というと、母は「戸をたてるとお客さんは入りにくくなるからね」といって、しもやけの手をさすった。（写真は明珍美紀撮影。2003年9月、なくなる4カ月前の遺影になる）

小林は書くのが好きで、国立国会図書館の検索だけでも鷺沼で13件、小林で34件の著作、寄稿を遺している。だが、自身や家族に触れることは極めて少なく、晩年になっての何点かがあるだけだ。その分、記憶の底に大事に仕舞ってあったらしく、書かれたものは昨日のごとく読む者の臉に浮んでくる。

父の父は家産を蕩尽したといい、父は貧窮に育ち、子供のうちから他家に奉公に出された。そのへんが小林の大阪生まれの土浦育ちと関係があるのかなのか。日露戦争では水兵で従軍し、乗艦が沈んで木切れ一枚につかまって一晩漂った。

母と父の出会いには知れない。母はなんの教育も受けていないというが、実によく新聞を読んでいた。家には本といえるものはない、新聞が唯一の活字だったが、新聞を読む母の姿を幼いときから見ていたので、女は誰もが新聞を読むと思っていた。

小学校を終えると、土浦高等女学校に進学した。県立の4年制で、校内の図書館に入りびたるようになる。家に1冊もなかったけれど本は小学生のころから好きで、友達から借りまくって読んでいた。それが、だれ憚ることなく本の山があるのだから女学校とは格別にいいところだと思った。

読むと同時に、書くも始める。既に6年生ころから見よう見まねで、詩のようなもの、短歌のようなもの、俳句のようなもので学習ノートを埋めていたが、これも女学校で磨きがかかる。4年生のときには、親友2人の代作まで買って出ている。これはさすがにばれて、親友2人の作品には「誰が書いたか分っています」の赤ペンがついて戻されてきた。

という、内籠りの文学少女だったわけではない。小学校の5年、6年のころはドッジボールに入れ込み、クラスの選手となって真つ黒となり、男子チームと闘うのが痛快だった。女学校でもお転婆やまず、遅刻しそうになると、教室の窓枠に飛びついて懸垂運動の要領で反転着地なんて芸当も出来た。

4年は直ぐに経つ。さらに進学は夢だったが、果たせぬ夢と決めていた。だが、下働きや父のような奉公も嫌だった。土地ではまだ、大半が、小学校を出ると女中奉公に出るか、不況が続くと芸子に売られていく子も珍しくなかった。

そんな悶々のある日、母の読む新聞で速記職を知った。これだと思った。速記を身に着けた女性がさる外交官の秘書として海外へ行くという記事で、実名で載っていた。それで手紙を出したら親切な返信が戻ってきた。これと決めたら果敢に行動に出、しかも手順を的確に探り当てる手腕は見事というほかない。

さっそく東京に出て、2、3しっかり下見して、牛込見附の佃速記塾に決めた。幸い、都内に住む叔父が居候させてくれることになり、1933年3月、土浦高女を卒業すると2年間、みっちり修業した。講師は貴族院の速記者で、寺小屋風の雰囲気満ちたが、だれもが一心だったから励むことができた。

●速記者で世の中へ一步

翌々35年3月、なんとか資格を取ると、速記者として日本大学に就職する。仕事の中身は知れないが、おそらくは講義録の作成などに関わったことだろう。だとすれば知識を身に着けるにも有益だったに違いない。さらに、せっかく大学に在るのだからと夜間の講義にも挑戦したが、これは直ぐに尻尾を巻く。お勉強には向いてないと自覚、おかげで夢の清算もできた。

日大での給金は75円。当時丸の内の女性社員が30〜40円のころで、男女による差別もなかった。正業のほかにアルバイトのひき合いもあり、時給10円が相場だった。ちなみに塾通いの合間のアルバイトでは、封筒の宛名書きが日給70円だった。

日大には5年間勤めて、40年には大阪に転じ、最初の結婚もする。結婚で転じたのか、転じて結婚したのか定かでないが、24歳

の転機だ。大阪では知人の紹介で大阪時事新報社に入り、念願の社会部記者になっている。給金は60円。まるまる新人記者ながら夕刊に「生活進軍」という戦時下の生活改善をテーマに30回の連載をものにしていく。

翌年、長女出産を祝ったが、何があったかほどなく離婚して土浦に帰っている。このへんは動きが急で戸惑うが、ぼつん、ぼつんの事柄だけで本人は終生全く語っていない。

とまれ、42年3月、速記者として東京日日新聞(毎日新聞)に入社する。採用枠2人の中の1人で、ほかにも志願者がいたようだ。配属は連絡部で、主に、各地の地方支局から専用電話で読上げられる原稿を聞き取り、文字に起こす仕事になる。

ここでの作業はけっこう荒い。送り手は時間の制約の中で気が立っている。固有名詞や聞きなれない用語があつて聞き返すと「なんだ、わかんねえのか」とどやされる。実際、速記の技術も小林自身が「われながら下手だった」と後年、述懐している。そんなこんなでほとほと嫌気がさした。

同期入社で既に文化部で実績あげていた杉野糸子(のち古谷)に相談すると、社会部長にわたりをつけてくれた。当たって砕けるで意気込みを訴えると、「じゃあやってみろ」となった。この新聞社、かねて、こんなふうのところがある。けっこう血みどろの派閥抗争もやるが、原稿の出来ばえは真つ当に評価され、いいものはいい、という気風がある。

それに戦況いよいよ逼迫して、新聞記者も次々召集され人手不足になっていた。意欲があるならやらせてみよう、だ。そしてい

きなり根性を見せつける。おりから、軍神となる山本五十六の戦死が伝わり、世人関心の葬儀が行われるので、遺族の談話をとってこいと指示された。辛い仕事だ。第一、取材記者が勝手に葬儀場へ入れるわけもない。

小林は、甲問の身なりに整え、表から潜入した。頃合いを計って遺族席に近づき、作ったばかりの名刺を渡して名乗った。とたん険しい顔の親族に遮られ、外へと追われた。帰社してそのまま報告すると、「ほう、なかなかやるじゃないか」と、なった。

とにかくやるしかない。志願して入ったのだから、辛い無理だのいつてられない。そして、「自分は女なのだから、働く女性を取材しよう」と考えた。世は既に「男は戦場、女は銃後」が蔓延していて、あらゆる職場に女性が投入されていた。

そこで働く女性の現場に入り込もうとひたすら歩き続ける。といて、どこでも入れるわけではない。誰もが必死の形相で働かされている。そんな中へ新聞記者がこのこ入って行けば邪魔もの扱いで、軍神の葬儀場の二の舞となる。そこで軍需省の記者クラブに所属し、お上の便宜を活用する。

だがお上の便宜には制約も伴う。「戦意昂揚」「辛抱我慢」、この枠をはみ出すと、即発禁になる。「当時は自分の感じたことをストレートには書きませんでした。すべては戦争のための生産増強の時代でしたから」とは、後年の回想になる。

小林の取材作法が並みじゃないのは、取材を忘れるところにある。見たり聞いたりにとどまらず、体で現場に入っていく。福島県湯本の常磐炭鉱では切羽まで入った。「ようやく体が立つくらい

の狭い空間で、恐ろしいところだった。つるはしで男の人がトンコと石炭を掘って、それを女の人がスコップでトロッコに積むというそんな原始的なやり方だった」といった具合だ。

男と女は夫婦。夫婦でなければ、こんな危険で苛酷な労働は出来ない。なにしろ地下の穴ぐらは熱い。男は真っ裸、女ももうしわけ程度の腰巻ひとつ。薬缶に生ぬるい水が入っていて、杵に塩が入っている。塩をなめ、ぬるい水を吞んで、掘り、運ぶ。小林は下着に一枚だけ羽織って地底を同感してきた。

●女性を無視した労働環境

東京・三鷹の飛行機をつくる軍需工場では夜間作業を体感してきた。44年7月、東条内閣が総辞職し、戦況は悪化する一方だった。空襲が激しく、これを避けて夜間作業に重きがおかれるようになる。全国各地の工場などで働く学徒や挺身隊などの若者が次々と命を落としていく。そんな中で、女性労働者は、男たちにまさる不当な荷重を押しつけられていた。

それは、工場の仕様ひとつとっても、男用に造られていて、女性に余計な無理を強いている。起重機にしても工作機にしても立派にこなしているが男と女では身長差がある。専用の足台ひとつ工夫すれば解決のつくことだ。現場の責任者に、男というだけで20歳そこそこの工員を就けているが、生理に無知だし、言うこと自体に臆する。何にもまして便所に困っている。

いや、一番の問題は、女性の体は子供を産む母体だということ忘れてる。一方で「産めよ、殖やせよ、お国のためだ」と大

声をあげながら母体の保護に一片でも思いがあるのか。国も企業も、そして男たちはいったいなにを考えているのか——。

小林は、ある日の社会部の部会で、こう、ぶちあげた。すると思いもかけず、部長がいった。

「君、それ書けよ。書いてもいいよ」

社会部を志願したとき「じゃ、やってみろよ」と言ったのと同じ部長だ。小林は一日家に籠って450行を書き上げた。

「勝利へと結集する国民総力の一半はいま女子によつて最も目覚しく昂揚されている——（社会部員 鷲沼登美枝記）」

書き出しは、こうなっている。なんだ、甘っちょろい、と読むならば、それは後世の後講釈。当時は、こう書き出さなければ記事にはできない。こう書き出すことによつて書きたいことがある程度書ける。戦況逼迫の戦時下の記事だ。小林は、こういう意味でも並みではない筆力を持っていた。

女子工員の力は伸ばされてゐるか

現場からの痛切な「声」を聴く（1944年10月8日付）

朝刊裏表1枚の時代の2面の大半を埋め、右の見出しを5段立て、筆者の署名入りで載せた。異例といつていい。毎日新聞の社史『「毎日」の3世紀』は「450行を超える大作である。勤務体制、厚生施設、賃金など女子工員の労働実態を細かく具体的に報告した硬派のルポだ」と評している。

社史は、この後の小林の動静も記録しているので、以下そのまま引用する。

小林は軍需省の記者クラブに所属していたので、数字的な裏付

けから厳しい戦況がよくわかった。45年にはいると物資の動きからみても戦争の継続が無理であることがはっきりしてくる。取材は厳しくなり、公表できる事実に限られていた。

小林は、婦人時局研究会に参加して婦人問題に取り組み、市川房枝氏の薫陶も得た。末端の女性労働者、市井の女たちの姿を取材し続けていた女性記者の目は、迫りくる敗戦を冷静に看破していた。8月15日、あの暑い夏の日の小林の回想。

「戦争が終わったのは、ただもう、嬉しかった。（中略）天皇の録音盤の放送を聞きながら、その日の原稿を書くことが頭の半分にはあつたけれど、それよりも、ああ嬉しい、という気持ちの方が強かったです。これからは女の時代が来るぞ、とはっきり思いました」（世界思想社刊『女性記者』より）

政治部記者となつたのは46年6月、婦人参政権が認められた初の総選挙で39人の女性代議士が誕生した年である。当時の国会は女性記者の姿などほとんどなかったから、珍しいものでもみるような目付きで見られた。服装、結婚に関することでセクハラまがいの目に合つたり、まじめに取材に応じない男性議員に腹を立てたこともあつた。（以上『「毎日」の3世紀』）

戦後の小林は、新聞社の中に居るよりも社外に居る方が多かつた。そう、自分でも述懐している。パルプ原料が枯渇しているから新聞紙の割り当ては一層厳しく、夕刊なし朝刊2ページ建てが続く、占領軍（GHQ）の指令や示唆以外の記事は書いても載る場所がない。極端をいえば、大本営発表がGHQ発表に変つただけのようなものだ。

だが巢ごもり雑用での身過ぎ世過ぎは小林には無理だった。最初に実を結んだのが「婦人民主クラブ」の結成。これは加藤シヅエ、羽仁説子、宮本百合子らが、GHQの女性解放担当、エセル・ウィード中尉から国防婦人会や愛国婦人会に代わる組織づくりを打診され、4カ月ほどの議論を経て1946年3月の創立大会に至る。小林は時局研究会などから以来の縁で「あなた、おやんなさい」と最年少で発起人に組込まれている。

●労働組合でも熱意こめ、最初のページ

前後して、これも生まれたての労働組合活動にも積極的に関わる。46年の新聞単一発足時の婦人部長（東京）に就き、同年10月の新聞ゼネストでは揉みに揉まれを体験している。「働く者の団結は戦時下では全く禁じられていた権利だから職場に新しい時代をつくっていかねばと燃えた。連帯のストやデモに出かけて、外（社外）に居る方が多かった。それで、会社には好ましくない人物と思われたのね」とは、これも後年の述懐になる。

実際、翌47年5月には、最初の職場追放に遭う。労働運動史に遺る三瀬・局付事件だ。これは後の章で改めて触れることになるが、労働組合の御用組合化と、これに連携しての会社による不当労働行為といっている。小林が遭ったのは「局付」の方で、5月12日付で、政治部から編集局付となった。

局付とは担当がないということ、「仕事はしなくていい。給料は出す」と言われた。天国にみえるが、窓際に追込んで自己退職を強いるという悪辣な人事だ。小林の他に牧野純夫（経済）、菅沼勝

太郎（同）、光田善孝（政治）、橋本博（同）、今泉正浩（同）、大川秀吉（社会）、小林孝祐（同）と計8人で、牧野は単一本部の書記長、菅沼と今泉は小林と同じ執行部の一員。あとの4人も組合活動の場で会社にとつて煙たい存在だったのは間違いない。

配転の理由は「プレスコード（GHQによる報道規制）を侵す恐れがある」だ。治安維持法にも似た予防検束で理由にも何にもなっていない。さすがに当時の組合も「原職復帰、できなければ転属」の方針を立て会社と交渉したが埒あかず、8人は翌48年1月7日、都労委（東京都労働委員会）に提訴した。

公の場に立てば、不条理が通るわけもない。同年5月、都労委は「組合活動を嫌った会社の不当労働行為」との断を下し、会社に8人の原職復帰を命じた。だが、理不尽承知の会社は命令に従わず、さらに時日を潰し、翌49年3月31日、「原職復帰を建前とする職場配置を行う」という痛み分けに似た協定を結び、一応の決着となった。小林については、政治部長が「建前」を逆手に強硬に嫌い、出版局毎日グラフ編集部に配転となった。

結局、まる2年に近い棚ざらし。編集局記者でありながら仕事を奪われ、本来、脂乗りの30代入口を無為に潰された。配転された『毎日グラフ』は、48年7月創刊の写真誌（月2回刊）で、映画、演劇、文芸、文化、放送分野の話題を取込んで、けっこう売れたというが、小林の力量発揮の舞台になり得たのかどうか。

「戦時中は戦意高揚以外を書くことができなかつたし、そういう意味では、戦犯記事ばかりを書いていた。当時、第一線にいた者は報道と現実との落差を感じていたのですから、個々の中にはいつも

積然としないものがあって、戦後の自分自身の生き方に、随分影響があったと思います」

「戦後の平和と民主運動の中で、これから日本は素晴らしい国になっていくんだ、私も、そのために働かなくちゃいけないと燃えましたよね。世の中で割りを食ってきたのは、女です。平和と民主主義が貫徹しなければ、女性解放、男の解放も有り得ないのです」

これはいずれも、『女性記者』での取材に依るの回想。この思いのままに一路邁進が小林の小林たる姿なのだろうが、その思いが思いだけのまま過ぎたのが現実だった。この落差をいかに乗り切ったのか、原職復帰の闘いをどう展開したのか、このへんについても全く記録がなく、回想も遺されていない。

●慶事と理不尽

ただ、この間、47年10月には編集局の同僚・小林勇（欧米部）と結婚、翌々49年2月には、登美枝にとつては二女となる娘が生まれている。小林の半生で、最も理不尽な仕打ちに遭っているさ中の慶事と云っていいのだろうか。

いや、理不尽はなおも終わっていない。以下はまた、社史の記述をそのまま引用しよう。これをいったい何と読取ればいいのか。そういう記述・記録である。

50年6月に朝鮮戦争が起き、言論機関でのレッド・ページが始まる。この年の8月までに新聞・通信・放送、49社で解雇されたのは704人。小林は本社での解雇者49人の1人だった。彼女の新聞記者生活はこうした無念な形で終わった。

【注】

- ・ 出典Ⅱ『毎日の3世紀』のほか、その原典となる『女性記者―新聞に生きた女たち』（世界思想社1994年1月刊）、没後に遺族が編んだ『21世紀へつなぐ言葉』（ドメス出版2004年3月刊）、「小林登美枝没後10年のつどい」記録（『平塚らいてうの会紀要』第7号2014年6月刊）、さらに小林が寄稿した『文化評論』1977年8月号、『民主文学』1981年2月号、同83年10月号、同85年5号、『月刊民商』85年8月号、同90年10月号、『婦人通信』94年4月号など。
- ・ 貴族院Ⅱ帝国憲法下で、衆議院と共に帝国議會を構成した立法機関。
- ・ 新聞速記者Ⅱ「漢テレ・モノタイプ方式」が定着する1960年代初期までの新聞原稿の送稿は、手書きの原稿を列車便あるいはオートバイ便で運ぶほかは速記者によった。電話で読上げた原稿を速記者が速記記号で書取り、これを文字に復元する方式。いまでも国会の議事録作成は原則、この方式によっている。
- ・ 切羽Ⅱ炭鉱など坑内作業の現場。掘削の最先端。
- ・ 挺身隊Ⅱ勤労挺身隊。1943年9月23日の閣議で、販売店員、駅の出札係、車掌、理髪師など17業種について男子の就業を禁止。25歳未満の女子を勤労挺身隊に組織して対応した。これら業種に就労していた男子は軍需産業、あるいは戦地へ振り向けるという政策。
- ・ 新聞単一Ⅱ日本新聞通信放送労働組合。第三章77頁参照。
- ・ 新聞ゼネストⅡ第2次読売争議の過程で構えた。第三章78頁参照。
- ・ プレスコードⅡ巻末資料編280頁に全条収録。第二章76頁注参照。
- ・ 三瀬解雇Ⅱ局付配転の翌13日、業務命令に反したとして新聞単一財政部長の三瀬幸一（英文）を解雇。都労委に提訴し、同様、不当労働行為で「勝訴」となったが会社が応じず、局付と並行しての協定で、解雇撤回のうえ依願退職を受入れた。79、140頁参照。
- ・ 704人Ⅱ新聞協会の集計外の宮崎日日の3人を含む。